赤い羽根共同募金　今ある活動を「そだてる」助成　活動成果報告書

◎事業名：困難な状況にある子ども・若者支援フォーラム

◎申請法人・団体名：ぐんま若者支援団体リンク　上毛のみなみ風

◎配分額

３年間合計　2,951,000 円（１年目 996,000 円、２年目 997,000 円、３年目 958,000 円）

◎課題認識・解決の目標

近年の複雑化した社会変化の影響を受けて、社会的自立を目指している子ども・若者が困難を抱えて立ち止まり、適切な支援を受けられないまま孤立している状況が見られます。当事者には、困難な状況を目の当たりにした時に「他者の理解の無さ」が障壁になります。抱える問題に立ち向かい解決の方向に動きたくてもその方法や手段が判らず立ち動けず、時間だけが過ぎてもどかしさが残ります。困難を抱えて立ち止まっている子ども・若者が再び動き出すには周囲の関心や理解が必要です。また問題解決のために動いてくれる方がいることを知ってもらうだけでも支援者は動きやすくなります。私たちは、支援を必要としている方と支援者が上手く噛み合う社会の実現を目指して、民間の支援者のネットワークづくりと公的機関との連携、支援の活用を図りながら、困難を抱えている子ども・若者が真に社会的自立を目指せるように、切れ目のない社会的支援の仕組みが県内全域に広がっていくことを目指して、「支援フォーラム」を開催しました。

◎３年間の取組み

＜１年目＞

・支援フォーラム実行委員会を立ち上げ、支援の場で様々な実例に対応し実績を上げる実行委員会の目線でフォーラムを企画します。群馬県子ども・若者支援協議会主催の「県・市町村青少年相談担当職員研修会」とリンクし支援知識の習得する機会を狙い、また次の３点を目標として展開を広げました。

１．民間の支援者や団体等の関心を高める
２．全県域に支援活動の関心を広める
３．官民連携による支援システムを構築する

・県内各地の支援の意識の地域格差をなくすために中毛・西毛・東毛・北毛４地区の開催を目指します。その初年度の取り組みです。

＜２年目＞
・支援者の発掘と官民連携の重要性を広めるために、県の研修会と共有させ問題点を集約しながら開催しました。
・民間支援者と行政が連携を図れるようにその理解と周知を発信する努力を行いました。
・開催地「西毛地区」の子ども・若者支援の地域の格差や問題点を表面化させ問題解決に向けて、支援フォーラムの関心を広めたいと考え分科会を企画しました。
・開催終了後、ロビーにおいて多くの参加者が互いの交流を深めている様子が見られたことで、連携が実現できたものと実感できました。

＜３年目＞
・渋川市の不登校の状況が情報として入ったため「東毛地区」開催を「北毛地区」に変更しました。学校に行けない児童生徒は増える一方ではありますが、適応指導教室の利用数は少なく現状を打破したいという地元渋川市議会議員より話があり、その声に応えた形になります。困難を抱える子どもたちの問題を打破できるきっかけ作りとして、支援フォーラムの開催を目標としたらどうかということで意見が一致したため、企画に取り掛かりました。
・社会福祉協議会や不登校の子どもの支援を視野に入れた支援団体の取り組みなどが発表され、子どもや若者の課題の現状を参加の皆さまと共有できたものと考えます。
・基調講演に「子ども・若者育成支援推進法制定」に携わった静岡県掛川市久保田市長に講師をお願いしたことで、当実行委員会が原点に立ち戻り、さらに先を目指した活動を目標とすることができました。

＜総括＞
・支援フォーラムは、支援者や行政の担当者が必要とする「連携の場」を提供することができたのではないかと考えます。分科会では医療・福祉・教育・県および市議会議員の立場にある方々の貴重なご意見が提案されました。その課題に対する意識は開催側と参加者の区切りはなく、空間と時間を共有する連帯感が生まれました。人と人との繋がりは活動を興す力にもなります。支援フォーラムの開催はまさにタイムリーであったと考えます。
　３年の間に社会環境の変化は著しいものがありましたが、その状況下で情報を寄せ合い企画運営について意見交換を重ねた月日は、実行委員にとって学びの多いものでした。

◎ステークホルダーの変化（利用者、対象者、参加者、連携先など）
・分科会は３年間を通して課題別に企画しています。初年度は子ども療育園 chouchou と児童養護施設地行園、NPO 法人ターサエデュケーションから私たちができることは何かを考えた「多様な子どもたち」について語られました。「諦めた気持ちはなにがきっかけで立ち上がることができたのか」のテーマでは、不登校を経験した子どもの親として何ができたのか、どんなことがきっかけで次の段階に進めたのかという発表がありました。また群馬県子ども・若者支援協議会事務局と共に現状の課題と子どもと若者の未来について話し合いました。ゲートキーパー協会は、「気持ちが落ち込んでしまった時にはどんな声かけがいいのか」について講和をお願いしました。ぐんま若者サポートステーション、NPO 法人はじめの一歩、NPO 法人ぐんま若者応援ネットが登壇した分科会は「居場所と社会参加」について、生きづらさを抱える若者の現状を発表し討論しました。基調講演では池上正樹氏よりは引きこもる人たちの現実と課題についてご講演を頂きました。年代別の課題を意識した企画の初年度に続き、第２回の基調講演では参加条件のない（年代条件もない）湯浅誠氏が理事を務める「むすびえ」の、地域コミュニティの考えを聴講し、テーマのカテゴリー分けについて考えさせられました。この時の分科会は、子どもたちが自然の環境の中で過ごす「ぐんま里山学校」や不登校を経験した生徒の入学が多い「太田フレックス」、引きこもり支援団体の取り組みを支える「安中市社会福祉協議会」など子どもたちの居場所や若者の社会参加について発表と意見交換がありました。社会の情勢が変化する中でフォーラムも運営や企画について、状況に合わせた提案が出されています。
　第３回は「支援とは何か」というテーマに基づき、私たちの取り組みについて原点に立ち戻り、そこから先を見据えた目標を立てることになりました。「子ども・若者育成推進法」制定に携わった掛川市久保田市長に講演を依頼したことで大きな反響を呼んでいます。分科会では渋川市とみなかみ町の社会協議会の「官民連携」の取り組みや、渋川市教育長の理念のもとに提供される子どもの居場所づくりや、不登校経験を語ってくれた大学生の体験談発表がありました。「誰一人として取りこぼさない」渋川市教育長の言葉に大きな気づきがありました。安全な「居場所」を提供されている沼田市の「ごったく広場」は、誰でも集まれる場所を展開しています。
　第１回から第３回まですべての分科会においての発表内容は「困難があるかないかは関係なく、みんなが安心していられる場所」を提供する取り組みが多いことが共通していました。毎回足を運んでくださった県また市議会議員や医療・教育・福祉そして行政の相談窓口の担当者がいます。分科会ではそれぞれの立場が抱える課題などについて意見交換が行われています。同じ空間にいることで生まれる連帯感が有意義な交流を生み出しました。子どもや若者の未来を見守る人々が各地域に存在することを広める意味でも、支援フォーラムは必要であると認識しています。

◎できなかったこと、今後の課題
・核家族化の進行や地域社会の閉塞感もあって過剰な干渉は難しいものの、支援を必要として方には気持に寄り添ってくれる支援者の存在が不可欠と言えます。支援を必要としている人に無理のない形で支援の手が差し伸べられるようにするには、複数の支援者が連携して公的支援も活用しながら、困

難を抱えている子ども・若者、その家族を支えていく社会の実現が欠かせません。これをどのように解決に結びつけるのか。今後の課題ではないかと考えます。